

1

説明的文章(1)

◆指導ページ P.2～7◆

【指導のポイント】

説明的文章は、説明しようとしている話題や文章全体の構成が明確であり、具体例が多いのが特徴である。内容を捉える上では、指示語と接続語は大切な手掛かりとなる。指示語の指す内容に着目することで、筆者の主張への流れを読み取れるようにする。また、接続語の意味や用法に注意することで、文章中の前後の意味のつながりや隣り合う段落の関連を読み取れるようにする。

確認問題の板書例

■筆者の主張

失敗から回復するには、自分の考え方や行動を変えるだけのエネルギーが溜まるのを待つことが大切である。

■展開

●エネルギー⇨人間の行動の源

自分の考え方や行動を変える⇨不可欠

●失敗から早く回復

↓失われたエネルギーを早く溜めること

←しかし

意識して自分では生み出せない

←だから

ひたすら待つしかない

←失敗したとき

輪をかけて辛い

←しかし

頑張っても、よい結果が得られない

●エネルギー回復⇨自発的に行動

=

失敗への最高の対処法⇨自分の「回復力」を信じて

ひたすら待つ

=

■筆者の主張

●失敗が周りの人にも影響を及ぼしている場合

現実的な対応をするしかない

←

苦しい状況からうまく逃げる

←

周りからのプレッシャーをかわす

←そして

エネルギーの回復を待つ

重要語句

○悠長⇨ゆったり構えていて落ち着いていること。

演習問題 A の板書例

■筆者の主張

新しい技術や情報機器を受け入れるためには、人間そのものがより賢くなり、哲学を持たなければならぬ。

■展開

●人をつなぐ新しいものが出ると、最初は躊躇するが、多くの人が使い出すと、自然に自分の中に信用が生まれる

⇨

人間社会のおもしろさ

●例インターネット

大きな影響を与え、受け入れた社会そのものが変化

↓簡単に後もどりにできなくなる

←同様に

●ロボット⇨徐々に人間社会に浸透し、変革しながら、遠い将来ではない

人間の生活になくしてはならないものになる

↓

人と人をつなぐ情報機器が発展すると、人は人のことをかえって考えなくなってしまう

●例手紙⇨電話⇨携帯電話

人間⇨身勝手になり、単に通信するだけのよう機械

新しい技術や情報機器を受け入れるためには、人間そのものがより賢くならないとならない

↓

ロボットを作ること⇨人間とは何かを知ること

哲学

重要語句

○洞察⇨よく見通すこと。見抜くこと。

■筆者の主張(まとめ)

技術が進歩すればするほど、人間そのものに対する深い興味と洞察が必要

演習問題 B の板書例

■筆者の主張

理解はすべて目に見えない翻訳である。

■展開

●外国語を知らない人⇨翻訳が必要

翻訳⇨外国語で外国語の意味を近似的にとらえようとする作業

←しかし

もとの表現との間にずれを生じる

↓

多くの人⇨翻訳とは無関係な生活をしていると思っ

ている

↓

↓そうであるのか⇨問題提起

●例作品を読む

作品を読んで、そこに未知の問題があらわれれば、読者は創造力をはたらかせて、何とか分かろうとする

←

一種の翻訳 ※理解⇨翻訳的性格をもつ

●例話を聞く場合 翻訳的理解

口頭伝達における翻訳⇨読むときの翻訳の原形

●例「ここだけの話」⇨翻訳を受けるたみに変形

「おもしろい」話⇨理解する側でおもしろいと感じたものがおもしろい話⇨翻訳の結果

●例古典作品を読む

諸説紛々が生まれる

←

原文にある裂け目ができていて、読者、研究者の「翻訳」がその裂け目から顔をのぞかせる

←

各人の翻訳の差がはつきりした形をとるようになる

⇨諸説紛々の正体

重要語句

■筆者の主張(まとめ)

理解はすべて目に見えない翻訳である

2

説明的文章(2)

◆指導ページ P.8～13◆

【指導のポイント】

説明的文章では、何か事実や事例を提示し、そこから推論し一般論を展開する。このような文章を読む際には、形式段落ごとに要点をおさえ、段落相互の関係を捉える必要がある。段落の要点と各段落の相互関係を理解することで、著者が最も伝えたい文章の要旨を読み取ることも大切である。

確認問題の板書例

■筆者の主張
文章が生まれるまでに、無意識のうちに表現や発想などさまざまな選択がなされるので、それを使う人間の在り方までも反映される。

■展開

•ひとつの文章が生まれるまでの表現の外側から発想の内面へとレベル順にたどる

※もっとも浅いレベル⇨文字表記の選択

↓文字表記によって独特の語感を生む

例「ナカムラ」「ふらんす」の表記

※少し深いレベル⇨ことば選び・用語選択

↓ことばの選択によって、意味とからみあう

例「ふくらむ」「ふくれる」

自分の伝えたい意味合いを正確に表す

例「休み」

単に誤りを含んでいない⇨不十分

場面や文脈に応じて、どれほど忠実に伝えたいか、その時その場の表現意図に的確に対応する

■筆者の主張(まとめ)

•ことばを選び、表現を練ること

実際のイメージに接近しようとする努力

ことばの選択⇨表現すべき対象や現実のとらえ方も

選択

だから

その人自身が現れる

人間の行動の反映として、表現は豊かな広がりを見せる

演習問題 A の板書例

■筆者の主張
競技を行う意味は、敗北の経験を通して、他人が負けたときの気持ちを理解できるようになることである。また、最近では時間は浸るものから跨がれるものとなっている。

■展開

•競技⇨勝つためにする

←しかし

勝つのは一人の競技者、一つのチーム

•競技における普遍的な経験

負けるということの経験

=

負けて悔しい思いをした人は、他人が負けたときに、その悔しさ、悲しみが、痛いほど分かる

⇒

競技を行うことの大半の意味

•応援団は苦しい訓練に耐え、敗北の悔しさを競技者とともにするのが「美学」

⇨「苦しみの共有」

「判官びいき」に通じるものがある

=

敗者、薄幸の者に味方したいという心持ち

•「祈り」⇨「待つ」とともに、いま多くの人が忘れて

いる感覚

←現代では

時間⇨取り返しがつかぬもの

浸るものではなく、跨がれるもの

↓結果を何より先に知りたい

重要語句

○棒に振る⇨今までの努力や苦心を無にする。

演習問題 B の板書例

■筆者の主張
「自然」とか「美しい自然」は、はじめから存在しているわけではなく、物語をはさんで見ることによって、「美しい」とか「不思議」な自然に見えてくる。

■展開

•例アニメ『となりのトトロ』

普通を感じる自然⇨「自然」などと呼ばれない

トトロがいた森

←

「村おこし」のようになっていく

•例ゴッホの有名な絵『アルルの跳ね橋』

南フランスの田舎の何でもない橋

↓ゴッホ作「アルルの跳ね橋」

橋を見るために世界中の人がその田舎にやってくる

←

ただの日常風景の中の小汚い橋

↓その地方に住む人たちにとって

とんでもなく貴重な橋になってしまふ

↓橋が取り壊されて無くなっている

←

その橋のイメージ通りの橋を作る

⇨「観光の名所」にしなくてはならない

■筆者の主張(まとめ)

目の前に見ているものは、たいてい「ただの日常の風景」にすぎないもので、そんなに興味をそそられるようなものではない

←

しかし

「物語」をはさんで見ることによってそれらは、急に変化して、興味深いものに見えてくる

重要語句

○描写⇨あるがままの姿をうかび上がらせるように、えがき出すこと。

【指導のポイント】

詩、短歌、俳句の形式や特色を理解し、表現技法の特徴を捉える。また、表現技法や季語などの基本事項を理解し、それらが作品にもたらす効果を読み取ることができるようにする。

確認問題の板書例

2 ■内容

A しめやか…ひっそりと、もの静かなさま
市…市場
枇杷…季節「初夏」
●表現技法
四句切れ

B いこふ…休む
●表現技法
三句切れ

C 乏しきⅡ数が少ない
馬鈴薯…季節「秋」
●表現技法
乏しきかな沈みたる馬鈴薯の
←倒置法
沈みたる馬鈴薯の乏しきかな
句切れなし

D ●表現技法
大樹が思う合擬人法
文末↓大樹合体言止め
三句切れ

3

A 季語…寒牡丹 季節…冬
●表現技法
ほのとぬくしや
ほのかに温もりを感じさせる切れ字(感動の中心)

B 季語…山笑ふ 季節…春
●表現技法
故郷や
山笑ふ合擬人法
切れ字(感動の中心)

C 季語…露 季節…秋
●表現技法
空が肩つつむ合擬人法

演習問題 A の板書例

2

(4) ア 夕立かな↓力強さに欠ける
季語…夕立 季節…夏
イ 大枝伐り落とされぬ↓自然の生命力
季語…野分 季節…秋
ウ 水に雨降る↓ゆっくり流れていく様子
山ほとどきす↓穏やかな自然の様子
季語…ほとどきす 季節…夏

たふれん…字足らず
波の丈を…字余り

1 ■内容

●第一連

夏は行ってしまった

とても愛しているものたちを

おきざりにして

↑↑
倒置法

夏…愛しているものを、おきざりにして
⇒ 擬人法

●第三連
ひまわり…瘦せてゆく
麦わら帽子…胸に抱きしめている
⇒ 擬人法

演習問題 B の板書例

2 ■内容

季語…団栗 季節…秋
●表現技法
埋もれけり
切れ字(感動の中心)

(1) ア 季語…炭 季節…冬
イ 季語…紅梅 季節…春
●表現技法
紅梅や
空奪ひあひ合擬人法
切れ字(感動の中心)
ウ 季語…滝 季節…夏
エ 季語…赤とんぼ 季節…秋

3

ア かたぶさぬ…傾こうとしている
切れ字(感動の中心)
↓しずもうとしている
句切れ…三句切れ

二人の子どもが語らっている姿を詠んでいる

イ 句切れ…三句切れ
文末↓庭のプランコ合体言止め

野原で母親の周りを駆けめぐっている子どもの姿を描き、そこに木の芽の匂いが漂ってくるという、冬から開放された春の初めの情景を描いている。「童話的な雰囲気」は感じられるが、時間帯は「昼」であり、もの悲しさや寂しさは表現されていない。

ウ 月夜かな
切れ字(感動の中心)
句切れ…句切れなし

エ 病める児…病気の子
入りぬ
句切れ…三句切れ
文末↓黄なる月の出合体言止め

文学的文章(1)－小説

◆指導ページ P.20～25◆

【指導のポイント】

小説を理解する上では、登場人物をおさえ、境遇、他の人物との関係を捉えることで、全体をつかむ必要がある。登場人物の心情を捉えるには、直接的な描写だけでなく、人物の言動や様子など様々な角度から読み取る必要がある。主題を捉えるには、表現の特色に注意しながら、作品の筋の展開や組み立て、山場の部分に注目し、作者の執筆意図や作者が訴えたい内容を読み取ることが大事である。

確認問題の板書例

■場面
父親の会社が倒産し、借金を背負った父親と一緒に暮らす音和がある日、雨が激しく降る中、チラシ配りをしてる父親の姿を目撃する。

■人物
☆井上音和：中学二年。両親が離婚して好きでもない父親とアパートで暮らしている
☆父親：会社が倒産して借金を背負い、兄が経営する写真館で働き始めた

■情景・心情
チラシを配る父親
音和⇨伯父に抗議：腹立たしい
父⇨チラシ配りを深く受け止めていない
音和⇨安堵
⇨音和と父親が歩み寄っていく
音和⇨この(今の)父親が好き⇨身近になった父
父⇨ありがと～：感謝⇨音和⇨涙～うれしさ
ありのままの姿
⇨父と音和のふれあい
⇨父のふれあい
⇨音和⇨声はずませて父をよぶ
⇨布団のあたたかさ⇨匂いに喜ぶ
⇨干した布団が気持ちよくてうれしい

■場面
私(山口)が音楽室へ行くと、西澤が一人で練習をしていた。私(山口)と西澤は一緒に練習することになった。

■人物
☆私(山口)：ソプラノ担当・自分が吹くアリアに自信が持てない
☆西澤：バス担当・私(山口)のソプラノを信頼
☆高田千秋：アルト担当
☆中原：テナー担当

■情景・心情
私(山口)と西澤だけの練習
私(山口)⇨不思議な感じ・音が一番離れている
西澤⇨満足・「(お前の音は)吹きやすい・ついていてくれるから」⇨信頼
私(山口)⇨ため息⇨困惑
⇨うまく吹けない・感情表現ができない
⇨本音
私(山口)⇨西澤との噛み合わないような会話にムツとする
⇨自分の悩みを理解されないことへの不満
西澤⇨「山口のソプラノだから、俺らについてはいい」⇨信頼
⇨私(山口)⇨西澤(たち)の信頼が胸にしみた
⇨ふっきれる⇨正確に吹けばいい
⇨結果
⇨うまく吹こうという力みが消え、静かな感情がみなぎった
⇨情緒豊かに吹く⇨正しい技術で吹く
⇨西澤が私の変化を感じ取ったことがわかる
⇨私(山口)と西澤の心が通じ合う

演習問題 A の板書例

■場面
野球部に所属している「僕」は、野球以外に興味はなかったが、ある日縫いぐるみ売りの老人とテレビ局主催の「祖父孝行石段競争」にむりやり参加させられることになり、背中に老人を背負って石段を駆け登った。

■人物
☆僕：中学一年で野球部所属・野球以外に興味がない
☆老人：奇妙な動物ばかりの縫いぐるみ売っている・左目が不自由

■情景・心情
⇨「祖父孝行石段競争」に参加
僕⇨一心に石段を登る⇨辛い
老人⇨温かい・僕の体の窪みと納まりがよい
⇨僕と老人⇨つなぎ目なく一つにつながっている
⇨一体感
⇨本当に何かを分かった瞬間
⇨自分の心が本当のことを生み出した瞬間

⇨石段を登り終わって
老人⇨冬眠中のヤマネの縫いぐるみくれた
⇨泣いている⇨おぶってくれたことへの感謝
僕⇨驚き⇨戸惑い
⇨この上もなく大事なものを目の前にした気持ち
⇨冬眠中のヤマネの縫いぐるみを受け取る
⇨大事なもの⇨生き方が変わったきっかけ
⇨冬眠中のヤマネの縫いぐるみ
⇨ずっと僕のそばにあった⇨僕の一部
⇨自分の心が本当のことを生み出した瞬間の象徴
⇨僕⇨眼科医になった⇨主体的に生きる

■場面
野球部に所属している「僕」は、野球以外に興味はなかったが、ある日縫いぐるみ売りの老人とテレビ局主催の「祖父孝行石段競争」にむりやり参加させられることになり、背中に老人を背負って石段を駆け登った。

■人物
☆僕：中学一年で野球部所属・野球以外に興味がない
☆老人：奇妙な動物ばかりの縫いぐるみ売っている・左目が不自由

■情景・心情
⇨「祖父孝行石段競争」に参加
僕⇨一心に石段を登る⇨辛い
老人⇨温かい・僕の体の窪みと納まりがよい
⇨僕と老人⇨つなぎ目なく一つにつながっている
⇨一体感
⇨本当に何かを分かった瞬間
⇨自分の心が本当のことを生み出した瞬間

演習問題 B の板書例

■場面
野球部に所属している「僕」は、野球以外に興味はなかったが、ある日縫いぐるみ売りの老人とテレビ局主催の「祖父孝行石段競争」にむりやり参加させられることになり、背中に老人を背負って石段を駆け登った。

■人物
☆僕：中学一年で野球部所属・野球以外に興味がない
☆老人：奇妙な動物ばかりの縫いぐるみ売っている・左目が不自由

■情景・心情
⇨「祖父孝行石段競争」に参加
僕⇨一心に石段を登る⇨辛い
老人⇨温かい・僕の体の窪みと納まりがよい
⇨僕と老人⇨つなぎ目なく一つにつながっている
⇨一体感
⇨本当に何かを分かった瞬間
⇨自分の心が本当のことを生み出した瞬間

⇨石段を登り終わって
老人⇨冬眠中のヤマネの縫いぐるみくれた
⇨泣いている⇨おぶってくれたことへの感謝
僕⇨驚き⇨戸惑い
⇨この上もなく大事なものを目の前にした気持ち
⇨冬眠中のヤマネの縫いぐるみを受け取る
⇨大事なもの⇨生き方が変わったきっかけ
⇨冬眠中のヤマネの縫いぐるみ
⇨ずっと僕のそばにあった⇨僕の一部
⇨自分の心が本当のことを生み出した瞬間の象徴
⇨僕⇨眼科医になった⇨主体的に生きる

■場面
野球部に所属している「僕」は、野球以外に興味はなかったが、ある日縫いぐるみ売りの老人とテレビ局主催の「祖父孝行石段競争」にむりやり参加させられることになり、背中に老人を背負って石段を駆け登った。

■人物
☆僕：中学一年で野球部所属・野球以外に興味がない
☆老人：奇妙な動物ばかりの縫いぐるみ売っている・左目が不自由

■情景・心情
⇨「祖父孝行石段競争」に参加
僕⇨一心に石段を登る⇨辛い
老人⇨温かい・僕の体の窪みと納まりがよい
⇨僕と老人⇨つなぎ目なく一つにつながっている
⇨一体感
⇨本当に何かを分かった瞬間
⇨自分の心が本当のことを生み出した瞬間

文学的文章(2)－随筆

◆指導ページ P.26～31◆

【指導のポイント】

随筆には、文学的、論説的などの種類がある。随筆の内容に応じて、筆者の心情や考えをとらえる。文末表現や引用例から事実と意見を区別し、筆者が強調する内容とその理由を読み取ると、主題をつかむヒントになる。筆者の独特な工夫・表現や筆者が用いる表現技法にも注意し、総合的に考えることで、筆者が最も言いたいことをとらえていく。

確認問題の板書例

■テーマ
ゴリラを手がけ馴れてきた人(飼育係)の話について

■展開

- 閉園周辺の動物園で、ゴリラのビルが檻から逃げた
- ビル⇨お客様の中を歩いていた
- しかし
- お客様⇨騒がないでいてくれた
- ↓錯覚から生じた冷静
- 飼育係⇨一ト目でビルの後ろ姿が淋しそうに見えた
- ↓ビルの気持ちを理解
- ビル⇨檻に長く飼われていたため、外へ出てみたものの行きどころがなく、淋しくなった
- 飼育係⇨「ビル!」と呼ぶとビルは振り返って、手をつないで檻へ帰った
- ビル⇨お客様が叫ぶ・銃口を見つける
- 飼育係⇨立腹・恐怖
- 万が一あばれだしたら、撃とうと鉄砲を持ち出していたため
- どっちにとっても死闘
- 飼育係⇨動物の身になって考えてやれる人たちだからこそ、ビルの淋しさがわかった
- =
- 長年の飼育のなじみが花になって咲いた

■筆者の思い
人と動物の間には理解がたいいろいろもあるが、飼育係は動物の身になって考えてやれる人たちで、それゆえに、ビルの淋しさがわかった

演習問題 A の板書例

■テーマ
古い本にはさんである木の葉について

■展開

- 本に木の葉をさしはさむこと⇨珍しいことではない
- よくあること
- さして気にならない
- 伊藤仁斎『童子問』を読んだとき
- 本に木の葉をさしはさむこと⇨尋常ではない
- 二、三丁めくると、必ずひそませてある葉
- 誰が何のために?なぜ?
- いとわしい⇨不快⇨投げ棄てた
- 永井荷風の随筆『冬の蠅』所収の「枯葉の記」
- 「〜紙魚を防ぐ銀杏の葉、朝顔〜」⇨疑問が氷解
- 本にさしはさまれた木の葉⇨紙魚を防ぐため
- 自明とも思われること:当然
- =
- もの知らない人間には知る喜びがある
- 本にさしはさまれた木の葉⇨本をいとおしんだ心遣いのかすかな痕跡

■筆者の思い
丹念に木の葉を本の間にはさんでいた、克明そうな人物にたいして、親しみに似た感情を覚えた

重要語句

- ゆるがせ⇨おろそか。なおざり。
- 氷解⇨疑問や疑惑などがすっかり解決すること。
- 自明⇨証明するまでもなく、それ自身ですでに明白なこと。

演習問題 B の板書例

■テーマ
日本語の書き言葉について

■展開

- 多くの日本人⇨話し言葉と書き言葉の区別を、それほど意識していない
- 初め
- ぼく(筆者)⇨書き言葉は話し言葉の延長にすぎない
- ↓話し言葉と書き言葉の違いを認識
- その違いは何か?
- 日本語⇨「混じり文」:美しい
- ↓書いたものは美しい
- なぜ日本語に惹かれたのか
- 話し言葉の次元⇨答えられない
- 書き言葉の次元⇨緊張感がある
- 日本語の文字の歴史に否応なしに参加せざるを得なくなる⇨責任重大
- 自分が使う文字を選択する:いい意味での不自然さ
- 文字を使い分けができること⇨日本語の豊かさ
- 日本語を書くとき、書き言葉のなかに異質なものがあり、異質なものを同化するという経験をする
- ↓日本語の書き言葉に惹かれる

■筆者の思い
日本語を書くときには緊張感があり、そのために心のはたらきに影響している

筆者

- リービ英雄⇨アメリカ国籍。日本語を母国語とせず、日本語で創作を続けている作家。

【指導のポイント】

古典とくに、古文について学習する。古文は現代語とは異なる点(文法や仮名遣いなど)を理解して読む必要がある。古語には、現代も使われている言葉でも古文が書かれた時代とは意味が異なる語もあるので、そういう言葉には特に注意する。また、会話文を正しく読み取り、内容を理解できるようにする。

確認問題の板書例

1

■テーマ
水なしの池について

■本文
〔筆者〕「水なしの池は不思議だ、どうしてこのような名をつけたのだろうか」

〔土地の人〕「雨がとて多く降りそうな年は、この池に水がなくなり、日照りになる年は水が多く出る」

〔筆者〕「いつも干上がっているのならば、『水なしの池』と名づけるだろうが、水が出るときもあるそうなのに、一面だけをとりあげて名づけたのはだなあ」と言い返したかった。納得していない

重要語句

○あやし ①不思議だ。②異常だ。③何だか変だ。
④よくない。⑤見苦しい。

○いみじ ①たいそう。はなはだ。

3

■テーマ
教訓について

■本文

- ・他人の欠点を言ってはならない
- ・自分の長所を自慢してはならない
- ・人に恩恵を与えたときは心に留めておかない
- ・他人から恩恵を受けたときは、感謝の気持ちを忘れてはならない

演習問題 A の板書例

1

■テーマ
全昌寺に泊まったときのことについて

■本文

全昌寺に泊まった

曾良も前夜泊まったが、眠れずに一晚中裏山に吹き渡る秋風を寂しい思いで聞いていた

曾良とは一夜離れているだけだが、千里も遠く離れているように感じる

私(芭蕉)も秋風を聞きながら寮で横になっていると、夜明けにお経を読む声が聞こえた

食事の合図がして食堂へ入った

若い僧たちが紙と硯を抱えて追いかけてきた

庭の柳の葉が散っているのを、せめて一夜のお礼に掃き清めてから出発しようと思っていた

しかし慌ただしい様子で、わらじのまま書き捨てた

Aの俳句 季語：秋風 季節：秋
句切れ：二句切れ 秋風聞くや
体言止め 切れ字

Bの俳句 季語：散る柳(↓柳散る) 季節：秋

表現技法

- ・倒置法：語順を逆にして印象を強める
- ・反復法：同じ言葉を繰り返して、意味を強めたりリズムを整えたりする
- ・比喻：何かにたとえることによって印象を強める
- ・体言止め：行の終わりを体言で止め、余韻を残す

演習問題 B の板書例

2

■テーマ
鶯について

■本文

輔親 鶯がいつも十時ごろにやってきて鳴いていたのを、珍しいことだと思いい、それ以外は見向きもしなかった

有名な歌人たちに「明朝八時ごろいらしてお聞きください」とふれまわった

当直の伊勢武者に明日のことを伝えて、鶯打ちなどしてよそへ行かせないよう言った

八時頃、歌人たちが集まってきた、苦心しながら詩歌を作りあっていたが、正午を過ぎても鶯が現れない

伊勢武者 今朝はいつもより早く参上したが、帰ってしまいそうだったので、召しとどめた

鶯を逃してしまいそうだったので、矢をつがえて射落とした

人々はおかしかったが、伊勢武者の表情に気おされて笑うことができなかった

皆帰ってしまった

興ざめたなどという言葉では表せないくらいの出来事

重要語句

○ありがたし ①めつたにない。珍しい。
○あさまし ①あきれられる気持ちだ。